

**[A年]復活節第3主日(2021年4月18日)****【旧約聖書日課】列王記上 17章17~24節**

<sup>17</sup>その後、この家の女主人である彼女の息子が病気にかかった。病状は非常に重く、ついに息を引き取った。<sup>18</sup>彼女はエリヤに言った。「神の人よ、あなたはわたしにどんなかわりがあるのでしょうか。あなたはわたしに罪を思い起こさせ、息子を死なせるために来られたのですか。」<sup>19</sup>エリヤは、「あなたの息子をよこしなさい」と言って、彼女のふところから息子を受け取り、自分のいる階上の部屋に抱いて行って寝台に寝かせた。<sup>20</sup>彼は主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、あなたは、わたしが身を寄せているこのやもめにさえ災いをもたらし、その息子の命をお取りになるのですか。」<sup>21</sup>彼は子供の上に三度身を重ねてから、また主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、この子の命を元に返してください。」<sup>22</sup>主は、エリヤの声に耳を傾け、その子の命を元にお返しになった。子供は生き返った。<sup>23</sup>エリヤは、その子を連れて家の階上の部屋から降りて来て、母親に渡し、「見なさい。あなたの息子は生きている」と言った。<sup>24</sup>女はエリヤに言った。「今わたしは分かりました。あなたはまことに神の人です。あなたの口にある主の言葉は真実です。」

**【使徒書日課】****コロサイの信徒への手紙 3章1~11節**

<sup>1</sup>さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。<sup>2</sup>上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないうにしてください。<sup>3</sup>あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。<sup>4</sup>あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。

<sup>5</sup>だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。<sup>6</sup>これらのことのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下ります。<sup>7</sup>あなたがたも、以前このようなことの中にいたときには、それに従って歩んでいました。<sup>8</sup>今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。<sup>9</sup>互いにうそをついてはなりません。古人をその行いと共に脱ぎ捨て、<sup>10</sup>造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。<sup>11</sup>そこには、もはや、ギリシア人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開人、スキタイ人、奴隷、自由な身分の者の区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのものうちにおられるのです。

**【福音書日課】****マタイによる福音書 12章38~42節**

<sup>38</sup>すると、何人かの律法学者とファリサイ派の人々がイエスに、「先生、しるしを見せてください」と言った。<sup>39</sup>イエスはお答えになった。「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがすが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。<sup>40</sup>つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる。<sup>41</sup>ニネベの人たちは裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。ニネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。ここに、ヨナにまさるものがある。<sup>42</sup>また、南の国の女王は裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。この女王はソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来たからである。ここに、ソロモンにまさるものがある。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

## 列王記上 17章17～24節

17これらの出来事の後、この家の女主人の息子が病気になった。病気は大変重く、その子はいよいよ息絶えた。18彼女はエリヤに言った。「神の人、あなたは私と何の関りがあるのですか。あなたは私の過ちを思い起こさせ、息子を死なせるために来られたのですか。」19しかしエリヤは、「子どもを私によこしなさい」と言って、彼女の懐から息子を受け取り、自分が泊っている階上の部屋に抱いて上がり、寝台に寝かせた。20そして主に叫んだ。「わが神、主よ、私が身を寄せているこのやもめにまで災いをもたらし、その子を死なせるおつもりですか。」21彼女は子どもの上に三度身を重ね、主に叫んだ。「わが神、主よ、どうかこの子の命を元に戻してください。」22主はエリヤの願いを聞き入れ、その子の命を元に戻されたので、その子は生き返った。23エリヤはその子を抱いて階上の部屋から降りて家の中に入り、その子を母に渡した。「御覧なさい。子どもは生きています」と言うと、24彼女はエリヤに言った。「あなたが神の人であることが、たった今分かりました。あなたの口にある主の言葉は真実です。」

## コロサイの信徒への手紙 3章1～11節

1あなたがたはキリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。2上にあるものを思いなさい。地上のものに思いを寄せてはなりません。3あなたがたはすでに死んで、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているからです。4あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。

5だから、地上の体に属するもの、すなわち、淫らな行い、汚れた行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝にほかなりません。6これらのことのために、神の怒りが不従順の子らの上を下るのです。7あなたがたも、以前このようなものの中に生きていたときは、そのように歩んでいました。8しかし今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、冒涇〔別訳→悪口〕、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。9互いに嘘をついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、10新しい人を着なさい。新しい人は、造り主のかたち〔→像〕に従ってますます新たにされ、真の知識に達するのです。11そこには、もはやギリシア人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開の人、スキタイ人、奴隷、自由人の違いはありません。キリストがすべてであり、すべてのものの内におられるのです。

## マタイによる福音書 12章38～42節

38そのとき、律法学者とファリサイ派の人々の何人がイエスに、「先生、しるしを見せてください」と言った。39イエスはお答えになった。「邪悪で不義の時代はしるしを欲しがるが、預言者ヨナのしるしのほかにはしるしは与えられない。40つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中になる。41裁きの時には、ニネベの人たちが今の時代の者たちと共に復活し、この時代を罪に定めるであろう。ニネベの人たちは、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。だが、ここに、ヨナにまさるものがある〔別訳→まさる者がいる〕。42裁きの時には、南の女王が今の時代の者たちと共に復活し、この時代を罪に定めるであろう。この女王はソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来たからである。だが、ここに、ソロモンにまさるものがある。」

**黙想のためのノート****次主日聖書日課について**

・4月18日「復活節第3主日」の日課主題は「新しい命」。伝統的には、復活節第3主日まで福音書日課に「復活顕現」の箇所が読まれてきた。日本基督教団の聖書日課では、第2主日までの年と第3主日までの年がある。第3主日に「復活顕現」の箇所が定められていない場合も、「復活」に関連する箇所が福音書日課および使徒書日課に定められている。

**旧約日課(列王記上17章より)**

・「列王記」は、ユダヤ教正典中「前の預言者」の最期に置かれた「王国時代史」を物語る文書で、上下巻に分けられて扱われているが、元来は一卷書として著されている。また、「前の預言者」に区分される「ヨシュア記」、「士師記」、「サムエル記」は、大括りで「カナン定住時代史」として一体的に編纂されており、第一巻である「ヨシュア記」でカナン定住生活を始めた「イスラエル」が、士師の時代を経て、王国時代に入りアッシリアにより北王国が、バビロニアにより南王国が滅亡しカナンの所有地を失うまでが、最終巻の「列王記」で語られるところである。

・日課箇所は、いわゆる「エリヤ物語」の一部。「エリヤ物語」は、「列王記」の中間部に置かれ、続く「エリヤ物語」と組み合わせられて、「列王記」における「古典的預言者像」を提示する物語となっている。ただし、「エリヤ物語」が、民間伝承的な「エリヤ伝承」だけでなく、王宮で作成保管された文書を資料として考えると考えられるのに対して、「エリヤ物語」のほとんどは民間伝承的な「エリヤ伝承」を資料として考えると考えられる。預言者エリヤが北王国史において王宮政治に深く関与し続けたのに対して、預言者エリヤは、王宮政治から排除されたところに留まり続ける一方、伝説的な活動によって後進の預言者ら(エリヤら)に大きな影響を与えた人物であったことの帰結であろう。

・日課箇所は、前段(17:8~18)も聖書日課の参考箇所として提示されているように、前段と一体の逸話として解釈されてきた。すなわち、前段で登場する貧しいやもめ親子が、日課箇所の女主人とその息子と同一であると解釈されるのが一般的な読解であったが、厳密には別個の逸話が並べられていると考えられる。

・17節「この家の女主人(בַּעֲלַת הַבַּיִת) パーアラー・ハバイト)」は、前段の「やもめ」を指しているようにも解釈できるが、「列王記」編者は、より巧みな修辞効果を狙ってこの表現を用いていると考えられる。すなわち、前段の直前で、アハブ王の王妃として「シドン人の王エトバルの娘イゼベルを妻に迎え」(16:31)たと語られる中で、彼女の持ち込んだ「バアルの神殿(בַּיִת הַבְּעַל) ベート・ハバーアル)」が建てられたと物語られる。つまり、「女主人」は、「バアル」の女性形、「神殿」と「家」は同じ語で、語順と冠詞「ハ」の付し方

の違いがあるため意味合いは異なるが、「この家の女主人」という語には、「バアルの神殿」の響きを取り取ることが意図されていると考えられる。しかも、前段冒頭にあるように、この逸話の場面は、王妃イゼベルの出身地「シドン」に設定されている。それは、この「女主人」がバアル宗教信奉者であるという意味ではない。「バアル」の語によって「列王記」が象徴的に示そうとしている事柄が、神像(偶像)という宗教事象と結びついて語られる「アシェラ」と同じ次元のものではないことを示唆しているのだろう。そもそも、「バアル」という語は、宗教用語(神の名)ではなく、「所有者」を意味する一般的な用語として旧約で広く用いられている。

・預言者が死者を蘇生させる奇跡は、「エリヤ物語」にも類似の逸話が見られる(王下 4:18~37)。新約における主イエスや使徒たちの死者蘇生奇跡の逸話は、このエリヤの逸話を模して組み立てられていると考えられる例が多い。逆に言えば、このような死者蘇生奇跡は、預言者(神の人)に付与された神祕(霊的)能力であり、神の御業の現れであり、これを模して語られる「新約」の死者蘇生奇跡は、あくまで預言者的神癒を描こうとしているのであって、いわゆる「復活」とは区別して構成されていると理解されるものである。

**使徒書日課(コロサイ3章より)**

・「コロサイの信徒への手紙」は、使徒パウロが宣教した「アジアの教会」の一つであるコロサイの教会に宛てて記され、近隣ラオディキアの教会などにも回覧されて読まれたと考えられる(コロ 4:16)。同じ地域に「エフェソ」もあり、「黙示録」が語る「アジアの七つの教会」が一定の関係性を維持しながら形成されていったことが推認される。

・本書箇所は、「エフェソの信徒への手紙」との類似性が顕著で、他のパウロ書簡に比べて宇宙論的表現が多用されているところに特徴がある。パウロは、宛先教会の人びとの思想的背景を考慮して各書簡での論を展開していると考えられるが、アジア地域(現在のトルコ、アナトリア半島のエーゲ海沿岸地域)は、紀元前6世紀のペルシア帝国支配の時代以降、東方の宗教思想の影響を大きく受けてきたと考えられる。その思想の特徴は、二元論的世界観で、天文学的知識に基づいて、天上界の写しとしての地上界、天上界における善神と悪神の対立などを構想した思想として知られる。このような思想は、ユダヤ思想やギリシア思想にも大きな影響を与えたと考えられているが、パウロ書簡の場合、「エフェソ書」と「コロサイ書」に顕著に表れており、パウロがこの地域の人々の思想的背景として前提と考えていたものと推察される。日課箇所では、「上にあるもの」と「地上のもの」との対比的表現に特徴的に現れている。

・一方で、日課箇所後半部は、「ガラテヤ書」3:26~29などと非常に類似している。

**福音書日課(マタイ 12 章より)**

・日課箇所は、主イエスとファリサイ派の人々との論争の一つとして共観福音書が共通して伝える逸話伝承であるが、各福音書で置かれている文脈が異なり、主イエスの言葉にも大きな相違が見られる。「マルコ福音書」は、「しるし」を求めて論争をけしかけてきた人々に対して、主イエスが「今の時代の者たちには、決してしるしは与えられない」(マルコ 8:12)と突っばねて終わってしまうが、「マタイ福音書」では、限定的な「しるし」を提示されている。「ルカ福音書」でも、「マタイ福音書」と同様に「しるし」が提示されるが、その内容は異なり、またそもそも文脈としては人々からの「しるし」の要求を前提としていない。このような相違から、この逸話伝承の原型(主イエスが実際に教えられた事柄)を明瞭にすることは困難である。そこで、解釈は、それぞれの福音書がこの題材を用いて取り上げようとした主題を明確にすることから始まる。

・「マタイ」と「ルカ」はどちらも、この逸話伝承を「ベルゼブル論争」から始まる一連の教えの中に置いているが、配置の仕方の違いから、主題設定の相違が推認される。「マタイ」は、前段に「木とその実」の教えを置き、「自分の言葉」が終末の「裁き」において問われるということが告げられたのに続けられている。そこで、「マタイ」は、「ヨナのしるし」を、ヨナ自身が「三日三晩、大魚の腹の中にいた」ことを通して悔い改めたこと、またニネベの人々がヨナの宣教によって悔い改めたこととして、提示する。一方、「ルカ」は、前段に「幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である」(ルカ 11:28)という主イエスの教えを置いており、「ヨナのしるし」は、ニネベの人々がヨナの説教を聞き入れたこととして、提示されている。「南の国の女王のしるし」も同様に解釈される。

・これを踏まえて、「ヨナのしるし」が主の復活を指し示すしるしとして解釈されてきたことを理解する。

**来週の誕生日 (4月18日~24日)****主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-323 番「喜び祝え、わが心よ」(= I 153)は 17 世紀ドイツの代表的な讃美歌作家パウル・ゲアハルトと、同じく代表的な作曲家ヨハン・クリューガーのコンビによる讃美歌の一つ。17 世紀のドイツ讃美歌の特徴は、内面的信仰を歌う「歌による信仰告白」。
- ・21-57 番「ガリラヤの風かおる丘で」(= III 5 番)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともにうたおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・蒔田尚昊が曲を付した。
- ・21-476 番「あめなるよろこび」(= II 150 番)は C. ウェスレーの代表的な讃美歌の一つ。『讃美歌 21』で改訳されている。曲は、ドイツ生まれでアメリカで活躍した音楽家ザンデルの作。日本では別の曲(475 番 = I 352 番)との組み合わせで歌われてきたが、476 番の曲や別の曲が近年は標準になっている。

**21-323「喜び祝え、わが心よ」****Auf, auf mein Herz, mit Freuden**

1. Auf, auf, mein Herz, / mit Freuden nimm wahr, / was heut geschieht; / wie kommt nach großem Leiden / nun ein so großes Licht! / Mein Heiland war gelegt / da, wo man uns hinträgt, / wenn von uns unser Geist / gen Himmel ist gereist.
2. Er war ins Grab gesenket, / der Feind trieb groß Geschrei; / eh er's vermeint und denket, / ist Christus wieder frei / und ruft «Viktoria!», / schwingt fröhlich hier und da / sein Fähnlein als ein Held, / der Feld und Mut behält.
3. Das ist mir anzuschauen / ein rechtes Freudenspiel; / nun soll mir nicht mehr grauen / vor allem, was mir will entnehmen meinen Mut / zusamt dem edlen Gut, / so mir durch Jesus Christ / aus Lieb erworben ist.
4. Die Welt ist mir ein Lachen / mit ihrem großen Zorn; sie zürnt und kann nichts / machen, all Arbeit ist verlor'n. Die Trübsal trübt mir nicht / mein Herz und Angesicht; das Unglück ist mein Glück, / die Nacht mein Sonnenblick.
5. Ich hang und bleib auch hangen / an Christus als ein Glied; / wo mein Haupt durch ist gangen, / da nimmt er mich auch mit. / Er reißet durch den Tod, / durch Welt, durch Sünd, durch Not, / er reißet durch die Höll; ich bin stets sein Gesell.
6. Er dringt zum Saal der Ehren, / ich folg ihm immer nach und darf mich gar nicht kehren / an einzig Ungemach. Es tobe, was da kann, / mein Haupt nimmt sich mein an, mein Heiland ist mein Schild, / der alles Toben stillt.
7. Er bringt mich an die Pforten, / die in den Himmel führt, daran mit güldnen Worten / der Reim gelesen wird: Wer dort wird mit verhöhnt, / wird hier auch mit gekrönt; wer dort mit sterben geht, / wird hier auch mit erhöht.

(Ev. Gesangbuch 112)

**21-476「あめなるよろこび」****Love Divine, All Loves Excelling**

1. Love divine, all loves excelling, / Joy of heaven to earth come down; / Fix in us thy humble dwelling; / All thy faithful mercies crown! / Jesus, Thou art all compassion, / Pure unbounded love Thou art; / Visit us with Thy salvation; / Enter every trembling heart.
2. Breathe, O breathe Thy loving Spirit, / Into every troubled breast! / Let us all in Thee inherit; / Let us find that second rest. / Take away our bent to sinning; / Alpha and Omega be; / End of faith, as its Beginning, / Set our hearts at liberty.
3. Come, Almighty to deliver, / Let us all Thy life receive; / Suddenly return and never, / Never more Thy temples leave. / Thee we would be always blessing, / Serve Thee as Thy hosts above, / Pray and praise Thee without ceasing, / Glory in Thy perfect love.
4. Finish, then, Thy new creation; / Pure and spotless let us be. / Let us see Thy great salvation / Perfectly restored in Thee; / Changed from glory into glory, / Till in heaven we take our place, / Till we cast our crowns before Thee, / Lost in wonder, love, and praise.